

内田啓一著

『日本仏教版画史論考』

川瀬 由 照



2011年2月20日発行
法藏館
A5判 380頁
定価 10000円(本体)

版画は周知のように木・銅・石製の版で文字や画像を刷りあげたものである。我が国では木製の板木が最も多く、最古の印刷物として著名な百万塔納入の「無垢浄光大陀羅尼經」のように古くから存在していた。仏教版画は、日本美術史や仏教美術史研究の中では等閑視されることが多く、正面からこれを取り上げてきた美術史研究者は数えるほどしかいなかった。むしろ仏教史の中では古くから研究が盛んであり、最近でも東アジアの仏教交流史において刊本の研究は重要視されている。

従って美術史研究の世界では仏教版画の研究法は確立されておらず、本書によってはじめて比較検討の方法や伝来、制作技術、背景や意義についての考察方法が示されている。これはかつて著者が在職していた町田市立国際版画美術館で行った数多くの調査研究や仏教版画に関する展覧会の賜物なのであろう。そうした中で発表された論考を中心に新稿を含めたのが本書である。著者は数多

くの著作を世に出しているが、なかでも本書は研究の核をなすものといえる。日本の中世を中心として、仏教に関連する絵画や経典などの版画に関する著作であるが、単に版画に関する歴史を考察したものではない。仏像や経典などを彫った板木を押すという行為が重要で、いわゆる印刷とは異なる次元のものであると論じている。

まず本書の各章の具体的な内容からみていこう。各章のタイトルは左記のようになってい

序 仏教版画概要

第一章 仏教版画の種々相

第二章 密教図像の伝播と仏教版画

第三章 勸進と結縁、仏教版画

序章では、印仏と摺仏というこれまで判然としていなかった両者の概念について分類・考察し、仏教版画の概要について言及している。

第一章の各項目は「仏教版画の聖なる造形と納入空間の一特色」「短冊形と印仏の独立」、「融通念仏縁起明徳版本の成立背景とその意図」、「融通念仏縁起明徳版本の版画史的考察―大念仏寺本を中心に―」、「中世に開板された版画の板木」となっている。仏像に納入された仏教版画から印仏の意義について論じ、印仏は版画という遺物のみならず、料紙に仏像を印捺する行為が重要で、仏像が白紙に現れることによって仏と結縁する行為と指摘する。第一章において宗教行為としての印仏作法の重要性が論じられ、その後の各章各項にその思想的背景に迫る視点がみられる。さらに印仏だけではなく、版本の融通念仏縁起が摺られることの意味についても及ぶ。摺るといふ行為とそれにより複数枚できることが、追善と普及という両者の役割を行う手段となったことが論じられ、あわせてこの版本の成立について技法的に考察している。ほかにもこれまで全く先行研究のない板木の作例研究や、勸進によって短冊形印仏があらわれてくるのが重源及び重源関係の造像の多くを手がけた快慶以降であることなどの重要な指摘もある。

第二章では「宋請来版画と密教図像」「諸尊図像・陀羅尼等(九重守)」について―西大寺本を中

心に―」「西大寺流にみられる一尺四方の種子曼荼羅について」「密教と仏教版画、そして拓本」となっている。本書では各所で仏像の納入品が検討材料としてあげられているが、奮然請来木造釈迦如来像の納入版画はその中で最も早い例である。

本章ではこの釈迦像内納入版画や大東急記念文庫所蔵（現、五島美術館蔵）の応現観音図を通して宋代仏教における図像や版本とその請来についてまず考察する。前章とともに本章においても仏教版画を仏像内に納入する意味や我が国における図様の展開に考察が及ぶ。また、西大寺の木造文殊菩薩騎獅像に納入の諸尊図像・陀羅尼等のいわゆる九重守が泰山府君を主尊とする冥府の効用とそれによる追善供養の意図があることについての研究や、仏教版画が密教の中でどのように用いられていたかを推測し、唐摺本の伝来と版画の密教図像が我が国にもたらした影響について考究している。なお、応現観音図に関する論文の初出後、その美術史的価値と意義が再評価され、重要文化財に指定されている。

第三章では「古代の印仏と摺仏」「鎌倉時代の印仏と摺仏、そして勸進札」「経典の勸進と結縁」となる。印仏と摺仏の古代から中世における作例とその制作目的と発願者、制作費用等についてまとめている。前章までの結論にもとづき勸進と結縁

における造像について広く版画以外の作品からも考察を行っている。また経典の摺写、本書では摺経と称しているが、これも印仏と同様、摺るという行為自体が作善として重視されるべきであるという指摘、古代や中世までの各種の摺経を考察し、開板までの工程と周辺状況について検討している。以上はほんの一部の概要に過ぎず、本文中では詳細かつ慎重な検討がなされており、仏教版画に關して実作例を通してこれほどまでに考察したものはなかった。

近年の仏教美術史研究は作品の意味論・機能論研究がさかんである。仏教版画の意味・機能について論じたものはこれまでももちろんなく、像内納入品についてもこの点からの研究はかつてほとんどなかった。本書では版画を中心としてその内容と意義についての研究がなされている。著者による像内納入品の印仏・摺仏研究はすでに十年以上前にさかのぼるのは驚嘆に値し、最近の研究者がやっと著者に追いついたというべきであろう。ただし彫刻史研究者や仏画研究者は仏教版画の重要性をまだ充分理解していないということが本書を讀してはじめてわかる。

平安中期以降の仏教絵画研究にとって本書は必讀であるが、なお今後は著者による中国の仏教版画の研究が期待される。最近でも塔などから仏教

版画を含んだ遺物の発掘の報告が相継いでおり、宋代経典の見返し絵などにも重要な作例がある。

宋代文化の日本における影響について研究が近年盛んであるが、すでに本書で重要な考察がなされているのだが、今後さらに進展していく可能性を秘めている。他にも仏教版画の意味やその用いられ方に関する視点も今後広がっていくものとみられる。まだ詳細な調査の及んでいない印仏摺仏の研究や新発見も今後期待される。

なお、口絵図版が三十二点と多いのも考察の助けとなる。対象が印仏・摺仏であるためモノクロ写真で良いのだが著者の研究は版画の技法にまで及んでいる。墨の濃淡、紙質について詳しく検討しているので単なる図像の比較だけでなく、カラー図版による細部の比較写真も欲しくなってくる。著者が編纂した『大和路の仏教版画』や展覧会図録だけでなく、今後はオールカラーの図版集も期待されよう。

最後に、カバーには印仏の重要作品が和紙や板様の装飾の上に押されたものが装丁されている。好感のもてる本に仕上がっている。さらにはこのカバーを外した本体の表紙と裏表紙にも工夫が凝らされており、編集者や著者の意図が籠められていることを附記しておきたい。

（かわせ よしてる 文化庁美術学芸課文化財調査官）